# 男の決闘

ドリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の決闘

【Ｎコード】

Ｎ４３５９Ｇ

【作者名】

ドリーム

【あらすじ】

紳士の国の英国では貴族が一人の女性を巡って男同士の決闘が行なわれた。その儀式を日本の若者同士が、女性を巡ってその決闘を申し入れ再現された。さてその結末は？

１８００年ごろ決闘は、ヨーロッパを中心に多く行われていた。
そして紳士の国イギリスでは、好きな女性を射止める為に上流階級に多かった。
一方が決闘を申し込み、相手方が受諾すれば決闘が行われる。
決闘の申し込みは手袋を投げるか、相手の顔を手袋で叩くことによって行い相手が
手袋を拾い上げれば決闘が成立する。武器は剣、或いは拳銃が主だった。

朝森浩介は決闘に関するの本を読んでいた。よし、これだと頷いた。
その相手は朝森の恋敵である夕林公介である。なぜか俺と他人じゃないような名前だ。
同じコウスケに朝と夕、森に林だ。やはり何か因縁めいたものを感じる。
そうなのだ。二人は同じ一人の女に惚れてしまった事だ。

朝森と夕林は一年以上に亘って、城乃内麗子を巡って争って来た。
だが肝心の麗子は、どちらにも傾かず二人をはぐらかすばかりだ。
二人はある日、麗子にどちらかを早く選択してくれと迫った。

「そうねぇ、二人とも男らしいし優しいし包容力もあるし申し分ないわ。でも二人と結婚する訳にも行かないし、私だって困っているのよ」
「それなら、男らしく夕林と俺とで決闘で決めるのはどうだ」
「駄目よ。そんなの怪我でもしたらどうするの」
なんと優しい女だ。すると夕林公介が口を挟んだ。

「いや、男なら好きな女を取る為には、死ぬ気くらいの気持ちで戦うのが男だ」

「よく言った夕林。それで依存はないな」

「あーいつかは恋敵であるお前と、こんな日が来ると思っていたよ」

「よし分かった。それで俺は決闘について本を読んだのだが、ルールがある」

「ま！　まさかナイフを持ってやるのか・・・・・」

「まあ、それ位の覚悟がなくて決闘とは言えないだろうよ。死ぬまで殴りあうとかな」

「ねぇ二人とも止めて！　私の為に危ないことはしないで。お願い」

麗子はまさに名前の通り容姿端麗な女性だ。言うことが違う。

「よし、俺も男だ。朝森が望むなら死ぬつもりで戦うさ。命を賭けて戦う価値がある麗子のなら俺はいつだって死ねる・・・・・」

「そうだよ麗子、俺だって麗子の為に命賭けて戦うさ。それが男ってもんさ」

「生き残った者が麗子と結婚して、敗れた者への墓参りをするのさ。まぁ墓に眠っているの朝森だろうがな。クックク」

「二人とも冗談が過ぎるわ。勝ったって一人は刑務所行きよ。それが私への愛なの？　違うでしょう。もう少し二人とも冷静になってよ」

「分かってるさ。ちょっと夕林も俺も麗子の事になると熱くなるんだ」

「じゃあ朝森、どんな決闘をするってんだ・・・」

「それは後で決めよう。そこで麗子に頼みがあるんだ。決闘には

立会人が必要なんだ。出来れば麗子の他にも必要なんだ。そうだな多いほどいい。本来なら敗れた者は処刑されるのだ今の世の中はそうも行かない。大衆の前で恥をかく事だな。恥よって恥辱を味わうのだ。そして二人の前には二度と現れないルールはどうだ」

「よし受けた。そうだな決闘は高田の馬場の公園がいい」
「ほう、あの18人切りの堀部安兵衛が決闘をした場所だな」
「そうだ。俺たちの決闘にふさわしい場所だ。では明日正午、真昼の決闘だ」
「OK、ゲイリークーパー主演の映画だな」
「夕林、いちいち細かい説明はいいんだ」

そしてその日がやって来た。噂をどこで聞いたか野次馬が数百人も集まって来た。
レスリング会場リングのように、四角形のロープが張られていた。
麗子は心配そうな顔で、その時を待っていた。
やがて二人は、そのリング中央で決闘開始のゴングが鳴るのを待ちばかりだ。
二人は真夏にも関わらず手袋を持っていた。
「二人とも気持ちは嬉しいけど怪我をしないでね」
なんとも優しい麗子だろうか。

朝森が白い手袋で夕林の顔を張った。観衆がざわつく。
それを不適な笑み浮かべて夕林が拾いあげた。
これで決闘は成立した。観衆から拍手が沸きあがる。
「ねえねえ、あれはどう言う意味なの？」
「なんでも、貴族はあれで決闘を申し込む儀式だってさ。死ぬまで戦うらしいがな見ろよ、あいつ等の殺気、どっちが負けても良くて病院行きだな」

「いいぞ！　二人とも男の中の男だ」　二人は観衆に軽く手を振る。
「よし！　夕林、覚悟はいいな」
「お前こそ朝森。いくぜ！」
二人は上着を脱ぎ去りランニグシャツ一枚になった。
観衆がヤレーヤレーと叫ぶ。そして世紀の決闘が始まった。
「くたばれ夕林！！　ジャンケンポ～～～ン」

観衆はアングリと口を開いたまま動かない。
「バッカかぁ、あいつ等は！　帰ろう帰ろう」
「ハッハハハ。夕林！！　俺の勝ちだ。麗子は貰ったぜ」
夕林はガツクリと膝をつく。一方の朝森は喜び勇んで麗子に駆け寄った。

「麗子！　勝ったぞ。俺のプロポーズ受けてくれるな」
「な、なによ！　貴方達の決闘ってジャンケンであたしを決めたの？　呆れたぁジャンケンで決められるほど安っぽいの。二人共お断りよ。さいなら！」
「そ、そんなぁ麗子。君は言ったじゃないか怪我をするなってあれは嘘なの・・・・・・」

了

## （後書き）

これはオチだけを考えて書きました。
さて見事にオチたでしょうか。それは読者に委ねる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4359g/

男の決闘

2010年11月13日02時56分発行